

喪失と受容のための芸術実践

—彫刻表現における生命感賦与の方法—

所属：先端芸術表現研究領域

学籍番号：1323925

氏名：平野真美

要旨

本論文の目的は、筆者の制作中に生じた疑問である「彫刻作品における生命感とはなにか」、「生きているように感じる彫刻作品は、どのような方法で生命感を得たのか」という問いをもとに、彫刻表現における生命感に着目し、生命感賦与の方法をその目的や周囲への影響とともに明らかにすることである。本論文において生命感とは、生き活きとした生命力溢れる状態だけを指すのではなく、「生きているような」、「死んでいるような」、もしくは「蘇ったような」といった実感の伴う錯覚を引き起こす表現のことをいう。

本研究の方法として、彫刻表現における生命感賦与の方法を明らかにするために、まず作品の表面(外側)にアプローチすることで生命感を得た彫刻作品と、作品の内面(内側)にアプローチすることで生命感を得た彫刻作品について取り上げ、それぞれの作品における生命感賦与に有効な方法について調査分析する。そして、彫刻表現における生命感賦与に有効な方法として、生物の身体表面の特徴(外観、質感)を再現するアプローチとしての「身体内部を想像させるような表面の作り込み」、身体内部の特徴(機能、構造)を再現するアプローチとしての「身体機能を再現した内部構造」、「喪失のエピソード」、「身体機能が働いていることを示すような動き」の4点を主張する。さらに、以上の彫刻表現における生命感賦与の方法を、筆者の作品制作において実践し、その有効性を検証する。

本論文は、序章と終章を含む全5章で構成する。

序章では、研究背景、研究の目的とその方法、研究における主張、研究の意義と新規性、本論における「喪失と受容」と「生命感」の捉え方について述べる。また、研究の方法として、筆者の作品の特徴でもある作品の内面・表面両方から作品を制作する点について触れた上で、「作品表面へのアプローチ」については西洋美術における生命感のある彫刻表現について取り上げ、「作品内面へのアプローチ」については日本仏教美術のなかから生身仏について取り上げ、それぞれの表現においてどのように生命感賦与の方法が実現されているか、調査分析することについて述べる。

第1章では、「西洋美術における生命感—技巧と動き」と題し、西洋美術における生命感の表現について確認した上で、主にミケランジェロとロダン、ハイパーリアリズム彫刻につ

いて触れ、西洋の彫刻作品における生命感賦与の方法として、「身体内面を想像させるような表面の作り込み」、「身体機能が働いていることを示すような動き」、「喪失のエピソード」が重要であることについて述べる。

第2章では、「日本仏教美術における生命感—生身仏信仰」と題し、生きている存在として信仰される生身仏について取り上げる。まず日本仏教美術における「生身」の解釈について確認し、その生身性が本研究における生命感と近似していることに触れた上で、仏像がどのような方法で生身性を獲得し、生きている存在とされたか、その方法や目的を明らかにする。また、生身仏のなかでも、胎内から絹製の五臓が発見された清涼寺釈迦如来立像や、木製の五臓と骨格を胎内に持つ栄国寺厨子入阿弥陀如来半跏像、木造の五臓が胎内にあるという伝承が残る誓願寺阿弥陀如来像を中心に、人体に関連した像内納入品を持つ生身仏について取り上げ、その造像の目的や周囲への影響を、記録を元に考察する。そして、生身仏における生命感賦与の方法として、「身体機能を再現した内部構造」と「喪失のエピソード」が重要であることについて述べる。

第3章では、第1章から第2章までの調査、考察を踏まえ、彫刻表現における生命感賦与に有効な方法として挙げた4点について、筆者自らの作品制作において実践し、その有効性を検証、考察する。また、筆者の作品において主要なモチーフであるユニコーンについて、人類史におけるユニコーンの登場から現代までを追ひ、その成り立ちやユニコーンが表象するものの変容について述べる。また、筆者の作品の主要なテーマである「喪失と受容」に関しては、繊細かつ膨大な作業が必要な制作手法を取ることが、喪失とその受容や弔いのための儀式的行為である点について考察し、それらを物語ることが作品への生命感賦与に寄与していることを述べた上で、本論文の芸術実践の成果として、博士審査展出品作品「ランド・ストランディング」について論述する。

終章では、彫刻表現における生命感賦与に有効な方法を、筆者の芸術実践を元に検証した結果をまとめ、西洋美術における生命感賦与の方法と、日本仏教美術における生命感賦与の方法の両方を取り入れた筆者の制作手法の新規性や、喪失と受容のための芸術実践としての制作行為について述べ、本論の結びとする。